

## 第三章 順接仮定条件

順接仮定条件は、前件と後件とが未知かつ非事実の要素からなっており、普通「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」で結び付く条件表現である。ただし、未知とは発話時点で話者がまだ知らない事柄で、非事実とは発話時点でまだ起こらない仮定の事柄のことである。ところで、順接仮定条件は、まだ実現しない仮の条件として前件を仮定したとき後件が成り立つということを表わすものとされているが、これは、順接仮定条件の意味構造の一部である文面の意味構造を表わしているにすぎない。以下、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」に「～テモ」を加え、これらの言語形式で結び付く順接仮定条件の文面における意味構造と基底の論理構造とを分析し、論理構造を論理式により記述していく。そして、順接仮定条件の解釈をめぐる曖昧さを解明する。

### 1 「～バ」形式

#### 1.1 意味構造

言語形式「～バ」で結び付く順接仮定条件の意味構造を考えるに当たって、次の条件表現が発話されうる場面を、「前件真、後件真」「前件真、後件偽」「前件偽、後件真」「前件偽、後件偽」の四通りの組み合わせから引き出すことにする。

(1) 5 番バスに乗れば、市内に出られる。

以下、(1)の意味構造を、文面の意味構造と基底の意味構造とに分けてまとめることにする。ただし、意味構造を二つに分けるからといって、「～バ」形式の順接仮定条件の意味構造が二つあるということではない。

#### 1.1.1 文面の意味構造

(1)の「5 番バスに乗れば、市内に出られる」は、前件「5 番バスに乗る」が起こることを条件にして後件「市内に出られる」が起こると言っているものである。つまり、「前件真、後件真」の組み合わせである、

【2】 5番バスに乗るトキ、市内に出られる。<sup>1)</sup>

のような場面では、前件「5番バスに乗る」を後件「市内に出られる」の条件として(1)を発話することができるのである。

ところが、(1)は、前件「5番バスに乗る」が起こって後件「市内に出られる」が起こらないということは表わせない。つまり、「前件真、後件偽」の組み合わせである、

【3】 5番バスに乗るトキ、市内に出られない。<sup>2)</sup>

のような場面では、(1)は発話できず、【3】の場面で(1)を言うと、(1)はうそになる。

ところで、現実世界では、(1)の後件「市内に出られる」の条件は、(1)の前件「5番バスに乗る」のみとは限らず、

---

<sup>1)</sup> 以下、言語形式が発話されうる場面として考えられる組み合わせの例は、実際使われる言語形式の例と区別して【 】に例文番号を振ることとする。つまり、【 】の例はメタ言語として挙げているわけである。特に、【 】の例で、前件と後件との組み合わせを、「～バ」でなく「～トキ」で結び付けるのは、分析する言語形式と同じ言葉を使うことによる混乱を避けるためである。例えば、後程考察する「前件偽、後件真」の場面を、

A. 5番バスに乗らないトキ、市内に出られる。

B. 5番バスに乗らなければ、市内に出られる。

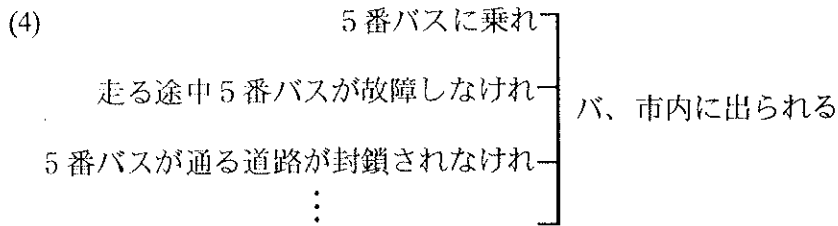
のうちのBとすると、「～バ」に引かれて、(1)は、「5番バスに乗らない」を条件にして「市内に出られる」が起こると言っているように捉えられがちである。さらに、「前件偽、後件偽」の場面を、

A. 5番バスに乗らないトキ、市内に出られない。

B. 5番バスに乗らなければ、市内に出られない。

のうちのBとすると、二重否定による、強い肯定と捉えられて、(1)は、「5番バスに乗る」が「市内に出られる」の唯一の条件のように思われがちである。これは、一見、発話されうる場面と実際の発話との間にズレが生じているようにも見えるが、実は、発話されうる場面の想定に、分析する言語形式と同じ言葉を使うことによる混乱が起こっただけのことである。つまり、それぞれのBは、実際の言葉の型にはまってその意味に引かれてしまっているのであり、前件と後件との組み合わせの場面の設定には不適切だと思われる。よって、前件と後件を結び付ける客観的な言葉として「～トキ」を用いることにする。

<sup>2)</sup> 実際の表現としては、「5番バスに乗っても、市内に出られない」のように、「～バ」が「～テモ」に変わる。



のように、幾つかの条件がすべて取り揃ってこそ「市内に出られる」が成立することになる。そのため、(1)は、前件以外の他の条件が一つでも満たされなければ、前件「5 番バスに乗る」が起こっても後件「市内に出られる」は起こらないということになる。そして、このような状況では、(1)の「5 番バスに乗れば、市内に出られる」は発話できなくなる。なぜなら、(1)の「p バ q」が、前件 p 以外の条件が満たされていない状況になるためには、例えば、

(5) [走る途中 5 番バスが故障する] 5 番バスに乗れば、市内に出られる。

のように、「p バ q」に [ ] のような前提が要り、(5)は、

(6) 走る途中 5 番バスが故障すれば、5 番バスに乗っても市内に出られない。

のように表わされるからである。(6)において「走る途中 5 番バスが故障する」を r とすれば、(6)は「r バ (p テモ) ~ q」の形であって、p はもはや「~ バ」の前件でなくなり、後件 q は ~ q に変わる。さらに、q を成り立たせる p 以外の条件を特に取り上げ、それが満たされている状況では、その条件が前件 p に選ばれたことになり、(1)は、

(7) 走る途中 5 番バスが故障しなければ、市内に出られる。

のような新しい「p バ q」表現に変わる。このように、q を成り立たせる p 以外の条件が

取り上げられる際には、それが満たされているかどうかに関わらず、元々の「 $p$ バ $q$ 」とは中味や形の異なる「 $\sim$ バ」形式になるのである。

ただし、実際の言語表現では、後件が成立するための条件を一々並べ立てるわけにはいかない。そこで、後件が成立するためのすべての条件に代わって、これらの条件から選ばれたある一つの条件が「 $\sim$ バ」の前件  $p$  になり、「 $p$ バ $q$ 」では、 $p$ 以外の選ばれない条件はすべて満たされていると見なされることになる。「 $p$ バ $q$ 」の前件  $p$  は、後件  $q$  を成立させるための一条件にすぎないものの、すべての条件の代表として選ばれているものであるため、「 $p$ バ $q$ 」では、前件  $p$  以外の条件は当然真と見なして一切問題視せず、前件  $p$  と後件  $q$  の関係にのみ触れているわけである。

以上のことから、(1)の「 $p$ バ $q$ 」の文面の意味構造は、「前件真、後件真」のとき真、「前件真、後件偽」のとき偽になる、【2】と【3】の場面だと言えるであろう。

### 1.1.2 基底の意味構造

(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」では、前件「5番バスに乗る」が起こらないときの後件「市内に出られる」が問題になることが時としてある。このことは、文面に示されていない、「 $p$ バ $q$ 」の意味構造をほのめかしているものと思われる。

では、(1)が発話されうる場面として、「前件偽、後件真」の組み合わせを考えてみることにする。

【8】 5番バスに乗らないとき、市内に出られる。

この【8】の場面では、前件偽の「5番バスに乗らない」をどう取るかによって、(1)が発話できる場合と発話できない場合とが想定できる。まず、【8】を、(1)が発話できる場面と見るときは、(1)の前件「5番バスに乗る」の他にも、後件「市内に出られる」が成立する方

法がある場合である。例えば、5番バス以外に、6番や7番バスに乗っても市内に出られるとすると、【8】の前件偽のところは、前件「5番バスに乗る」と置き換えられる「6番バスに乗る」「7番バスに乗る」などになり、【8】は、

【8】 6番（7番…）バスに乗るトキ、市内に出られる。

と取れる。この【8】の場面では、「5番バスに乗る」ことが「市内に出られる」ことの条件である限り、(1)が発話できるが、このときは、(1)の前件「5番バスに乗る」を後件「市内に出られる」の成立のための十分条件と見るわけである。次に、【8】の場面で、(1)が発話できないのは、(1)の前件「5番バスに乗る」が後件「市内に出られる」の唯一の条件である場合である。このときの【8】は、

【8'】 後件成立の唯一の条件が起こらない（5番バスに乗らない）トキ、後件が起こる（市内に出られる）。

と取れる。後件成立の唯一の条件が起こらないとき、後件が起こるはずがなく、従って【8'】の場面では、(1)は発話できない。つまり、(1)の前件「5番バスに乗る」を後件「市内に出られる」の成立のための必要条件と見るわけである。

今度は、(1)が発話され得る場面として、「前件偽、後件偽」の組み合わせを考えてみることにする。

【9】 5番バスに乗らないトキ、市内に出られない。

この【9】の場面で、(1)は発話することができる。ただ、前件偽の「5番バスに乗らない」をどう取るかによって、(1)は二つの解釈が可能になる。例えば、6番バスは町内を回るバス

で、7番バスは郊外行のバスだとすると、【9】は、

【9】 6番（7番…）バスに乗るトキ、市内に出られない。

と取れる。このときの「5番バスに乗る」ことは、「市内に出られる」ことの十分条件でも必要条件でもかまわない。前件が後件の必要条件である場合、【9】は、さらに、

【9'】 後件成立の唯一の条件が起こらない（5番バスに乗らない）トキ、後件は起こらない（市内に出られない）。<sup>3)</sup>

とも取れる。

以上のことから、(I)の「pバq」には、基底の意味構造が二つあることが分かる。つまり、「前件偽、後件真」のとき真になる【8】と「前件偽、後件偽」のとき真である【9】の場面、そして「前件偽、後件真」のとき偽になる【8'】と「前件偽、後件偽」のとき真である【9'】の場面の二つの基底の意味構造が考えられるのである。

## 1.2 論理構造

### 1.2.1 「（未知）バ（未知）」形式

先の1.1の分析から、順接仮定条件「～バ」の意味構造には、文面の意味構造に、前件が偽のときの情報としての基底の意味構造が加えられていることが分かる。「～バ」形式が発話されうる場面として想定される「前件真、後件真」「前件真、後件偽」「前件偽、後件真」「前件偽、後件偽」の四通りの組み合わせは二パターンにまとめられるが、これは基底の意味構

---

<sup>3)</sup> 実際の表現としては、「5番バスに乗らなければ、市内に出られない」のように、強い強調を表わす二重否定になる。

造によるものである。

以下、「～バ」で結び付く順接仮定条件の意味構造、つまり(1)の「pバq」が発話され得る場面を成す四通りの組み合わせのパターンに、1と0を当ててみる。まず、(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」が、【2】【3】のような文面の意味構造と【8】【9】のような基底の意味構造とを持つパターンをまとめてみる。

【10】 5番バスに乗るトキ、市内に出られ、カツ  
1 1 ⇨1

5番バスに乗るトキ、市内に出られないことはなく、カツ  
1 0 ⇨0

5番バスに乗らない（市内に出られる他のバスに乗る）トキ、市内に出られ、カツ  
0 1 ⇨1

5番バスに乗らない（市内に出られない他のバスに乗る）トキ、市内に出られない  
0 0 ⇨1

ただし、【10】における、三行目の～pと四行目の～pはその中味が異なっており、三行目の～pはqを成り立たせうる条件、四行目の～pはqを成り立たせえない条件である。

次は、(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」が、【2】【3】のような文面の意味構造と【8】【9】のような基底の意味構造とを持つパターンをまとめてみる。

【11】 5番バスに乗るトキ、市内に出られ、カツ  
1 1 ⇨1

5番バスに乗るトキ、市内に出られないことはなく、カツ  
1 0 ⇨0

5番バスに乗らない（市内に出られる他のバスはない）トキ、市内に出られることは  
0 1  
なく、カツ  
⇨0

5番バスに乗らない（市内に出られない他のバスに乗る、または市内に出られる唯一  
0  
の条件が起こらない）トキ、市内に出られない  
0 ⇨1



ただし、【11】の $\sim p$ は、三行目、四行目ともに $q$ を成り立たせえない条件である。つまり、先の【10】は「 $\sim p$ 」の前件が後件に対する十分条件の場面、【11】は必要条件の場面なわけである。このように、【10】や【11】のような場面の設定により、言葉による説明では混乱を起こしやすい $\sim p$ の中味や、お互いの場面が混ざり合って解釈されるようなことが避けられる。

今度は、「 $\sim p$ 」で結び付く順接仮定条件の意味構造を、真を1、偽を0として真理表にまとめてみることにする。なお、本研究では、真理表にまとめられた意味構造を、論理構造と呼んでいる。【10】の場面は(12)のように、【11】の場面は(13)のようにそれぞれ示される。

(12)	p	q	pバq	}	—	文面の意味構造	—	[	p	q	pバq
	1	1	1					1	1	1	
	1	0	0					1	0	0	
	0	1	1					0	1	0	
	0	0	1			}	—	[	0	0	1
						}	—	[			
						}	—	[			
						}	—	[			

(12)と(13)の、真理表の論理構造上には、「pバq」の文に示されている部分と文の背後に隠れている部分とを示してある。上の表から分かるように、「pバq」は、(12)と(13)という二つの論理構造に支えられている。それにも関わらず、「pバq」が一つの論理構造を持っているかのように見えるのは、文に示されている意味構造が一つであるからにすぎない。以上のことをまとめると、(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」は、

(14) 停留所に5番、6番、7番バスが止まるが、5番 ( $p=1$ ) と6番 ( $p=0$ ) は市内行のバス ( $q=1$ ) であり、7番 ( $p=0$ ) は郊外行のバス ( $q=0$ ) である。

(15) 停留所に5番、6番、7番バスが止まるが、5番 ( $p=1$ ) は市内行のバス ( $q=1$ ) であり、6番 ( $p=0$ ) と7番 ( $p=0$ ) は郊外行のバス ( $q=0$ ) である。

の両方の場面で発話されうるということになる。まず、(14)では、 $p = 1$  のとき  $q = 1$  であるが、 $p = 0$  のときは  $q = 1$  でも  $q = 0$  でもいいわけで、(14)の場面は(12)の論理構造を表わしている。一方、(15)では、 $p = 1$  のときは  $q = 1$ 、 $p = 0$  のときは  $q = 0$  で、(15)の場面は(13)の論理構造を表わしているものである。

(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」の二つの論理構造である(12)と(13)は、それぞれ命題論理学でいう、

(16)  $p \supset q$  (含意)

(17)  $p \equiv q$  (等値)

と同じ真理値を持っている<sup>9)</sup>。つまり、(1)が、(12)のような真理値を持つ場合は(16)の含意の論理式で表わせ、(13)の真理値を持つ場合は(17)の等値の論理式で表わせるのである。言い換えると、(1)が(16)の含意「 $p \supset q$ 」の論理構造の場合は、(1)は【10】(14)の場面における発話となり、(17)の等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造の場合は、(1)は【11】(15)の場面における発話となるわけである。このように、言語形式を論理式で表わすと、【10】や【11】のような場面を逐一説明しなくても言語形式の論理構造が一目で分かるようになり、文脈の助けがなくても条件表現の曖昧さが避けられるのである。

ただし、命題論理学では、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の論理に「 $\sim$ バ」「 $\sim$ ト」「 $\sim$ タラ」「 $\sim$ ナラ」が用いられるとしているが、本研究では、「 $\sim$ バ」のような順接仮定の言語形式は含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」との論理構造を持っているという見方をしている。つまり、命題論理学における論理は、命題間の内容上の関連ではなく、論理形式による真偽を問うものなのである。例えば、命題論理学でいう含意「 $p \supset q$ 」とは、「 $p \supset q$ 」の形式に

---

<sup>9)</sup> 近藤・好並(1979,29)によれば、含意は「前件真、後件真」のとき真、「前件真、後件偽」のとき偽になることから、「 $p \supset q$ 」において  $p$  は  $q$  の成立の十分条件、 $q$  は  $p$  成立の必要条件といってもよいとされる。含意と区別して等値には、「もし $\sim$ ならば、かつそのときに限り」「正確に $\sim$ のときに」「 $\sim$ のときにのみ」「ただ $\sim$ ならば」を対応させているが (Allwood, Andersson, Dahl(1977))、普通これらの表現は「 $\sim$ ナラバ」のみになることが多い。つまり、同形の言語形式に、含意と等値という異なる論理が内在しているわけである。

左右されて、 $p$ と $q$ との内容上の関連は無視し、「 $\sim$ バ」でさえあれば、(12)の真理値を与えてしまうものである。そのため、例えば、「鉄が重ければ、雪は白い」のような、意味のない「 $\sim$ バ」さえも、前件と後件がともに真であることから、真として成り立つとされてしまう。しかし、本研究では、「 $\sim$ バ」が発話される場面を考えており、それが命題論理学における含意「 $p \supset q$ 」の真理値と合致するため、「 $\sim$ バ」の論理構造に、含意という呼び方と「 $p \supset q$ 」という論理式をそのまま用いているというわけである。

では、順接仮定条件「 $\sim$ バ」の実例を見てみる。

(18) 停留所から登山道があって、二十分ほど歩けば「阿美寮」につくと直子は書いていた。 (森(上))

(18)は、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の両方の論理構造を持っている。(18)が含意「 $p \supset q$ 」の論理構造を持つ、というのは、

【19】 二十分ほど歩くとき、「阿美寮」につき、カツ

二十分ほど歩くとき、「阿美寮」につかないことはなく、カツ

二十分ほど歩かない（速足で十五分ほど歩く）とき、「阿美寮」につき、カツ

二十分ほど歩かない（五分ほどしか歩かない）とき、「阿美寮」につかない

のような場面で発話できることを表わす。そして、(18)が等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造を持つ、というのは、

【20】 二十分ほど歩くとき、「阿美寮」につき、カツ

二十分ほど歩くとき、「阿美寮」につかないことはなく、カツ

二十分ほど歩かない（五分ほどしか歩かない）とき、「阿美寮」につくことはなく、

カツ

二十分ほど歩かない（五分ほどしか歩かない）トキ、「阿美寮」につかない

のような場面で発話できることを表わしている。(18)は、文面では、前件「二十分ほど歩く」が起こることを条件にして後件「阿美寮」につく」が起こると言っている。ところが、実際は、(18)は、速足で十五分歩くか駆け足で十分走ることも後件成立の条件であるという想定に加わる含意「 $p \supset q$ 」と、前件「二十分ほど歩く」が後件成立の唯一の条件だという場面での等値「 $p \equiv q$ 」との論理構造に支えられているものなのである。このように、「 $\sim$ バ」は含意と等値の両方の論理構造を持っており、解釈の際、混乱が起こらないとも限らないが、次のように、前の文脈によって曖昧さが解消されることもある。

(21) 「あなたはここの冬を知らないからそう言うのよ」とレイコさんは僕の背中を叩いてソファーに座らせ、自分もそのとなりに座った。「長くて辛い冬なのよ、ここの冬は。……あなたも冬にここにくればそれよくわかるわよ」 (森(上))

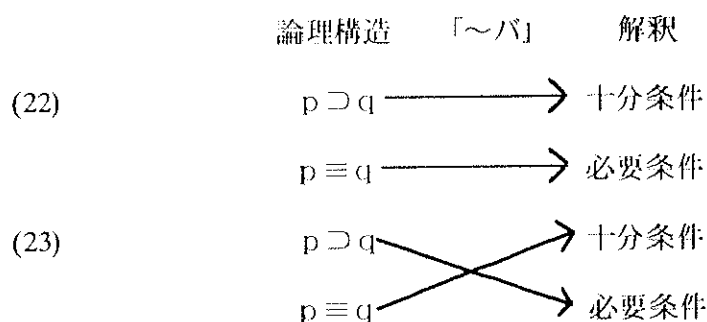
(21)の「 $p$ バ $q$ 」も、(18)同様、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の両方の論理構造を持つものである。ただし、(21)では、「 $p$ バ $q$ 」の前の文脈の「あなたはここの冬を知らないからそう言うのよ」から、前件「冬にここにくる」は、後件「それ（長くて辛い冬であること）がよくわかる」の唯一の条件と取れ、(21)は等値「 $p \equiv q$ 」と解釈されやすい。次節では、「 $p$ バ $q$ 」の解釈に触れることにする。

### 1.3 「 $\sim$ バ」条件表現の解釈

順接仮定条件に元々内在する論理構造とは別に、「 $p$ バ $q$ 」がどう解釈されるかは語用

論における問題である。順接仮定の条件表現「 $p$ バ $q$ 」からは三つの解釈ができると思われるが、それぞれの解釈における語用論のレベルは異なっている。

一つ目は、「 $p$ バ $q$ 」が含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」のうちのどちらかに解釈される場合である。前件 $p$ が後件 $q$ の十分条件と取れるか必要条件と取れるかによって、含意か等値かが決まるが、このことは基底の論理構造によるものである。ただし、話者が想定していた論理構造と聞き手の解釈が必ずしも一致するとは限らないため、混乱が生じることもありうる。そして、次の(23)の場合、誤解が起こることになる。



前件 $p$ を十分条件と取るか必要条件と取るかは周りの状況によるもので、まさに語用論レベルである。同形の言語形式に二つ以上の論理構造が内在するとき、その言語形式による条件表現は曖昧だと言えるが、(23)により、順接仮定条件の発話される場面と解釈との間に混同が起こるメカニズムが解明されたと思われる。このように、本研究では、論理式を、条件表現の文面の意味構造と基底の意味構造を記述するためのメタ言語として用いているが、条件の意味記述の道具として論理式を用いることで、主観的な表現が客観的に記述できると考えられる。

二つ目は、「 $p$ バ $q$ 」を逆含意「 $p \leftarrow q$ 」<sup>9)</sup>に従って解釈する場合である。1.1.1節でも述べた通りに、順接仮定の条件表現「 $p$ バ $q$ 」は、後件 $q$ が成立するための、前件 $p$ 以外の条件はすべて満たされているという前提の下で発話されるものである。ところが、実

<sup>9)</sup> 第二章2.1.2節参照。

際は、このような前提が無視され、前件 p が起こって後件 q が起こらないこともありうる  
と解釈されることもある。このように、「前件真、後件偽」が真と取れるのは逆含意「 $p \leftarrow q$ 」の真理値と同じである。ただし、この解釈は語用レベルで行われているとはいえ、前提が守られている、含意「 $p \supset q$ 」や等値「 $p \equiv q$ 」の解釈とは語用論の範囲が異なっていると言える。

三つ目は、「pバq」を推論が行なわれているものと解釈する場合である。例えば、5番バスが市内行であることが話者と相手の共有知識である場合にも、(1)の「5番バスに乗れば、市内に出られる」は発話できるが、このときの「pバq」は、相手に市内に出られる方法を教えているわけではなく、「出ていけ」とも「出ていくな」とも解釈される。他にも、強盗が家の主人を脅かして「110番回せば、警察が来るよ」と言った場合、この「pバq」は「できることならやってみる。あなたに110番通報はさせない。警察は来させない」ということを表わしているのであろう。このように、推論による解釈はさまざまであり、一様にはまとめがたいが、前件と後件に焦点を当てて、前件と後件のどこに、どのような状況が設けられ、どのような推論が行なわれているのかを、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」の区別を付けず以下にまとめておく。

まず、「pバ[ト、タラ、ナラ]q」は、「～p」、すなわち「pデキナイ」「pスルナ」と解釈される場合がある。

(24) 君にこの問題ができたら、天と地がひっくりかえる。 (草薙(1977))

(24)は、(1)と同じく含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の二つの論理構造を持つ順接仮定の条件表現である。草薙(1977:102)は、(24)に対して、

(24)は少なくとも現時点では、後件qの「天と地がひっくりかえる」が偽であることが明らかである。

したがって、

$$p \supset q$$

$$\sim q \quad \therefore \sim p$$

という否定式になる。これは推論の式を用いれば、

$$(p \supset q) \wedge \sim q \Rightarrow \sim p$$

となり、 $p \supset q$ という含意を前提に含み、明らかに偽である後件 $q$ を否定することで、前件 $p$ を否定するのである。

と述べ、(24)を含意「 $p \supset q$ 」の順接仮定条件と区別している。一方、近藤・好並(1979;33)は、(24)と同じ類の(25)をただの含意「 $p \supset q$ 」であるとしている。

(25) (テニスに熱心だが下手な友人をひやかす言葉)

もし君がデヴィス・カップの選手になれたら首でもやるよ。 (近藤・好並(1979))

ただし、近藤・好並(1979)は、含意「 $p \supset q$ 」とは前件と後件との内容上の関連が不必要なものだ、ということを示す一例として(25)を挙げているだけで、(25)は前件と後件との間に内容上の関連がなく、常識的に奇怪に思えるとしている。つまり、(25)の前件と後件の間には何の因果関係も存在しないと言っているわけであり、(25)で「 $\sim p$ 」のひやかしが表わせるのはなぜかという点については何も言及がない。しかし、もし、(25)の前件と後件との間に何の内容上の関連もないのなら、「 $\sim p$ 」という解釈も出てこないはずである。たとえば、二つの事柄がそもそも何の関わりも持たないとしても、その二つの事柄が「 $\sim$ バ」「 $\sim$ ト」「 $\sim$ タラ」「 $\sim$ ナラ」で結び付き、前件が成立することを条件にして後件が成立すると言うとなると、その二つの事柄の間に因果関係を認めざるをえない。したがって、(24)や(25)も、前件と後件の間に因果関係が与えられた順接仮定条件と見るべきであろう。草薙(1977)と近藤・好並(1979)では、順接仮定条件に内在する論理構造と推論による解釈とがはっきりされていない。(24)や(25)は、前件と後件が因果関係で結び付いている、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造を持つ順接仮定条件が語用論レベルで解釈される例である。このように、(24)や(25)が、「 $\sim p$ 」が引き出される推論が行なわれているように解釈できるのは、(24)や(25)における後件が絶対ありえない事柄だという現実世界の一般知識が働いている

るからである。他に、後件に絶対起こりえないという共通認識が働いている状況で、「～p」が「pスルナ」と解釈される場合もある。次の例を見てみる。

(26) 「隠すのなら離婚する。俺は大学でラグビー部キャプテンやったんやぞ。

たとえ癌だろうと、俺はホイッスルが鳴るまで闘うぞ」 (花)

(26)では、(24)や(25)と違って後件がありえないことではないものの、(26)の後件が、相手の意志に反する、相手にとってのマイナスの事柄であることを話者が既に知っていて、これを一種の脅かし、もしくは最後の切り札として使っている場合であり、この意味で(26)の後件は相手にとって極端な要素である。ただし、このとき推論される「～p」は、「pスルナ」といった否定命令、禁止と取れ、(26)では「隠すな」を表わそうとしていると見られる。次のように、後件が話者にとってマイナスの要素である場合の「～p」は、否定命令というよりやや柔らかい否定願望「pシナイデホシイ」を表わそうとしていると思われる。

(27) それに、秋津の問題は、葉山さんが責任を取る必要なんてどこにもないで

しょう？アヴィニョンから葉山さんがいなくなったら、私も店も困るわ。(花)

このように、含意と等値の論理構造を持つ順接仮定条件の後件に特別な共通認識が働く状況では、「pバ [ト、タラ、ナラ] q」は「～p」を推論するように解釈される。

次は、「pバ [ト、タラ、ナラ] q」が、「p」の「pセヨ」と解釈される場合である。

(28) (英語が得意な生徒に)

今度の英語テストで100点取ったら、アメリカへ語学研修に行ける。



(28)は、例えば、100点取れなくても私費で語学研修に行ける場面の含意「 $p \supset q$ 」と、100点取ることが語学研修に行ける唯一の条件である場面の等値「 $p \equiv q$ 」との論理構造のものである。ところで、(28)は、相手が「 $p$ 」するように励まし、相手に「今度の英語テストで100点取れ」を伝えようとしているように解釈されることがある。このような解釈は、まるで「 $(p \equiv q) \wedge q \Rightarrow p$ 」のような推論が行なわれているように見える。ただし、この解釈は、(28)の後件「アメリカへ語学研修に行ける」が、相手が起こってほしがる事柄、つまり相手にとってプラスの要素であることを話者が既に知っているという特別な状況の下で可能である。このように、(28)が「 $p$ セヨ」のように取れるのは、後件に特別な状況を設けたからである。

今度は、「 $p$ バ [ト、タラ、ナラ]  $q$ 」が、「 $\sim q$ 」の「絶対 $q$ シナイ」のように解釈される場合を見てみる。

(29) (アルファベットすら知らない生徒に)

今度の英語テストで100点取ったら、アメリカへ語学研修に行ける。

(30) 西から日が昇るのなら、彼と仲直りしてやる。

(29)と(30)は、前件の、絶対起こりえない、理不尽な事柄により、「 $\sim q$ 」を表わそうとしていると解釈される。このときは、「 $(p \equiv q) \wedge \sim p \Rightarrow \sim q$ 」のような推論が行なわれているように見えるが、このような解釈ができるのは、前件は絶対起こらないという認識が働いているからである。

ただし、「 $p$ バ [ト、タラ、ナラ]  $q$ 」で、「 $q$ 」と解釈される特別な状況としては、前件が相手にとってプラスの事柄だという認識が働く場合が考えられるが、「 $q$ セヨ」を表わすためにわざと条件表現を使うことはなく、 $p$ が成立する条件で「絶対 $q$ である」ということは推論による解釈とは言えない。

以上のように、実際の言語生活に当たっては、前件や後件がどのような共通認識と重な

るかによって、例えば、「動くと、撃つぞ」が「動くな」の代わりに、「一生懸命にやれば、ほしいものを買ってあげる」が「一生懸命にやれ」の代わりに用いられるなど、命令や否定を直接使うことを避け、婉曲な条件表現が用いられることは少なくない。順接仮定の条件表現でこのような使い方が可能なのは、前件や後件に常識や周りの状況が関わっているからであり、語用レベルの解釈である。とはいえ、内在する二つの論理構造のどちらに解釈するか、前件以外の条件はすべて満たされているという前提を無視する解釈をするかといった、前の解釈とは語用論の範囲が異なっている。

ところで、「～バ」で結ばれる条件表現には、

(31) ここまで来れば、彼も追っかけて来ないだろう。

(32) 彼女が来れば、彼も喜んだのに。

のようなものがある。(31)は前件に既知の事柄が来ており、(32)は既知とは逆の事態を述べているため、これらは順接仮定の条件表現には入れられない。これらの「～バ」は順接確定条件として扱い、第四章で考察することにするが、このことから、同形の言語形式が同じ論理構造を持たないということが分かる。

## 2 「～ト」形式

### 2.1 意味構造

次の「～ト」の、文に示されている意味構造と基底に隠れていながら文を支えている意味構造とを考えてみる。

(33) 薬の効果はめざましかった。が、サスケはその錠剤をまるのままではけっして飲みこまなかった。必ず吐き捨てた。好物のソーセージのなかに薬を詰めこんで与えると、どうにか咽喉を通るらしい。 (夏)

#### 2.1.1 文面の意味構造

(33)は、前件「好物のソーセージのなかに薬を詰めこんで与える」が起こることを条件にして後件「どうにか咽喉を通る」が起こることを言っており、前件「好物のソーセージのなかに薬を詰めこんで与える」が起こって後件「どうにか咽喉を通る」が起こらないことはない。つまり、(33)は、「前件真、後件真」の組み合わせである【34】のような場面で発話され、「前件真、後件偽」の組み合わせである【35】のような場面では発話できないのである。

【34】 好物のソーセージのなかに薬を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通る。

【35】 好物のソーセージのなかに薬を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通らない。

## 2.1.2 基底の意味構造

(33)は、「前件偽、後件真」の組み合わせの【36】の場面で、発話できる場合と発話できない場合とがある。それは、【36】の前件偽の中味により、(33)が発話できる【36']と(33)が発話できない【36"]とが想定されるからである。

【36】 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えないトキ、咽喉を通る。

【36'] 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（例えば、ハムのなかに菓を詰めこむとか、缶詰に菓を混ぜるなど、咽喉を通らせる他の方法がある）トキ、咽喉を通る。

【36"] 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（ソーセージのなかに菓を詰めこむしか咽喉を通らせる方法がないのに、このことが起こらない）トキ、咽喉を通る。

(33)は、「前件偽、後件偽」の組み合わせの【37】の場面で発話できる。ただし、前件偽をどう取るかによって、この場面は、【37']と【37"]という二つの場面として考えることができる。

【37】 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えないトキ、咽喉を通らない。

【37'] 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（菓をそのまま与えるなど、後件が成立しうる条件が起こらない）トキ、咽喉を通らない。

【37"] 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（ソーセージのなかに菓を詰めこんで与えるという、後件成立のための唯一の条件が起こらない）トキ、咽喉を通らない。

## 2.2 論理構造

### 2.2.1 「(未知)ト(未知)」形式

(33)の「pトq」が発話され得る場面としては二パターンが考えられるが、二パターンのそれぞれの組み合わせに1と0を当ててみると、【38】と【39】のようになる。

【38】 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通り、カツ  
1 1 ⇔1

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通らないことはなく、  
1 0 ⇔0

カツ

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（例えば、ハムのなかに菓を詰  
0

めこむとか、缶詰に菓を混ぜるなど、咽喉を通らせる他の方法がある）トキ、咽  
喉を通り、カツ  
1 ⇔1

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（菓をそのまま与える）トキ、  
0

咽喉を通らない  
0 ⇔1

【39】 好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通り、カツ  
1 1 ⇔1

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えるトキ、咽喉を通らないことはなく、  
1 0 ⇔0

カツ

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（ソーセージのなかに菓を詰め  
0

こむしか咽喉を通らせる方法がないのに、このことが起こらない）トキ、咽喉を  
通ることはなく、カツ  
1 ⇔0

好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えない（ソーセージのなかに菓を詰め  
0

こんで与えることが起こらない）トキ、咽喉を通らない  
0 ⇔1

つまり、【38】は含意「 $p \supset q$ 」の論理構造、【39】は等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造のものであり、(33)の「 $p \supset q$ 」は二つの論理構造を持っていることが分かる。なお、1節の「 $p$ バ $q$ 」と本節の「 $p \supset q$ 」とが同じ論理構造を持つということは、異なる言語形式が同じ論理構造を持つことの一例でもある。

### 2.3 「 $\sim \supset$ 」条件表現の解釈

(33)の「 $p \supset q$ 」は、周りの状況により、含意とも等値とも解釈される点で曖昧な表現だと言える。このことについて草薙(1977:107)は、

一つの表層構造に二つ以上の深層構造がある文は意味があいまいになるが、語彙や統語的に起るものは、文脈であいまいさがとれることが多い。ところが、…論理構造によるあいまいさは文の内容によるものであり、文脈からあいまいさが緩和されることは少ない。

と述べている。このように、「 $p \supset q$ 」は、その論理構造ゆえに曖昧な表現だ、と言えよう。なお、1.3節の「 $p$ バ $q$ 」同様、「 $p \supset q$ 」も語用論の範囲を変えることで、さまざまな解釈が可能になるが、このような解釈については本節では割愛する。

ところで、「 $\sim \supset$ 」で結ばれる条件表現には、

(40) 太郎は部屋に入ると、帽子を脱いだ。

のようなものがあるが、(40)は、前件と後件がともに既知、かつ事実の事柄であり、本研究でいう順接仮定条件には属さない。さらに、(40)は、前件と後件が因果関係で結び付いているとも言いきいが、このような「 $\sim \supset$ 」については第四章で触れることにする。

### 3 「～タラ」形式

#### 3.1 意味構造

次の「～タラ」の意味構造を、文面の意味構造と基底の意味構造とに分けて考察を進めていくことにする。

(41) 八時過ぎに東京行きがあった。典子は時計を見た。七時二十分だった。いまからだったら間に合う。急いで服を着換え、客用の軽自動車を使ったら間に合う。 (花)

##### 3.1.1 文面の意味構造

(41)の「pタラq」は、「pバ/トq」同様、「前件真、後件真」の組み合わせの【42】のような場面で発話され、「前件真、後件偽」の組み合わせの【43】のような場面では発話できない。

【42】 客用の軽自動車を使うトキ、間に合う。

【43】 客用の軽自動車を使うトキ、間に合わない。

##### 3.1.2 基底の意味構造

(41)の「pタラq」は、基底の意味構造も「pバ/トq」と同じである。(41)は、「前件

偽、後件真」の組み合わせの【44】の場面において、【44'】のように(41)が発話できる場合と【44''】のように(41)が発話できない場合とが想定される。

【44】 客用の軽自動車を使わないトキ、間に合う。

【44'】 客用の軽自動車を使わない（間に合わせる他の条件がある）トキ、間に合う。

【44''】 客用の軽自動車を使わない（間に合わせる他の条件がない）トキ、間に合う。

さらに、(41)は、「前件偽、後件偽」の組み合わせの【45】の場面でも発話できるが、「前件偽」をどう取るかによって、この場面は、【45'】と【45''】という二つの場面として考えることができる。

【45】 客用の軽自動車を使わないトキ、間に合わない。

【45'】 客用の軽自動車を使わない（前件を含め、後件が成り立ち得る条件が起こらない）トキ、間に合わない。

【45''】 客用の軽自動車を使わない（前件といった、後件が成り立ち得る唯一の条件が起こらない）トキ、間に合わない。

## 3.2 論理構造

### 3.2.1 「(未知)タラ(未知)」形式

(41)の「pタラq」が発話されうる場面は、「pバ/トq」同様、二パターンが考えられる。二パターンのそれぞれの組み合わせに1と0を当ててみると、【46】と【47】のようになる。

【46】 客用の軽自動車を使うトキ、間に合い、カツ  
1 1 ⇔ 1



客用の軽自動車を使うとき、間に合わないことはなく、カツ  
 $1 \quad 0 \quad \Rightarrow 0$

客用の軽自動車を使わない（間に合う、他の方法があり、例えば、無線タクシーを  
来させる）とき、間に合い、カツ  
 $0 \quad 1 \quad \Rightarrow 1$

客用の軽自動車を使わない（後件成立を妨げるようなこと、例えば、歩く）とき、  
間に合わない  
 $0 \quad 0 \quad \Rightarrow 1$

【47】 客用の軽自動車を使うとき、間に合い、カツ  
 $1 \quad 1 \quad \Rightarrow 1$

客用の軽自動車を使うとき、間に合わないことはなく、カツ  
 $1 \quad 0 \quad \Rightarrow 0$

客用の軽自動車を使わない（間に合う、唯一の条件が起こらない）とき、間に合う  
ことはなく、カツ  
 $0 \quad 1 \quad \Rightarrow 0$

客用の軽自動車を使わない（後件成立を妨げるようなことが起こったり、唯一の条  
件が起こらない）とき、間に合わない  
 $0 \quad 0 \quad \Rightarrow 1$

つまり、【46】は含意「 $p \supset q$ 」の論理構造、【47】は等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造のものであり、(41)の「 $p$ タラ $q$ 」は二つの論理構造をともに持っていることが分かる。

### 3.3 「～タラ」条件表現の解釈

(41)の「 $p$ タラ $q$ 」は、周りの状況により、含意「 $p \supset q$ 」とも等値「 $p \equiv q$ 」とも解釈される。ただし、「 $p$ タラ [バ/ト]  $q$ 」は、前後の文脈から、含意か等値のうちのどちらかに解釈が決まることもある。

(48) 引越しましょうよって私は言ったわ。それしかないわよ、これ以上ここに  
いたら緊張が強くて、私の頭のネジがまた飛んじゃうわよ。 (森(F))

(48)で、「これ以上ここにいる」を p、「私の頭のネジがまた飛んじゃう」を q とすると、(48)の「p タラ q」は、(41)同様、含意と等値の論理構造をともに持つ順接仮定の条件表現である。ただし、(48)の「p タラ q」は、点線の「それしかない」という文脈から、どうも「 $\sim p$  タラ  $\sim q$ 」つまり、等値に取れやすい。(48)では、p「これ以上ここにいる」に対する  $\sim p$  を「引っ越しする」と見ていると思われ、(48)の「p タラ q」は、「引っ越しをすれば、私の頭のネジが飛ばない」と解釈されることが分かる。なお、「p バ／ト q」同様、「p タラ q」も語用論の範囲を変えることで、さまざまな解釈が可能になるが、このような解釈については本節では割愛する(1.3節参照)。

ところで、「 $\sim$ タラ」には、

(49) こんなに込んでいたら、間に合わないだろう。

(50) 図書館に行ったら、花子がいた。

(51) もっと勉強してたら、試験に受かったのに。

のような用法もある。(49)は、前件が既知の事柄の順接確定条件であり、(50)は、前件と後件がともに既知の事柄ではあるが、それら二つの事柄の間に因果関係が認めにくいものである。そして、(51)は、いわば反事実的条件文である。これらの「 $\sim$ タラ」については、第四章で考察を行なうことにする。

## 4 「～ナラ」形式

### 4.1 意味構造

益岡(1993)は、「～ナラ」を、「前件が成り立つことを仮に想定し、その想定のもとで、後件で判断・態度の表明が行われる、典型的な仮定の表現である」と述べている。以下、この「～ナラ」の意味構造を考えてみる。次の例を見てみる。

(52) レディースさんたちが忘年会に出るのなら、私たちは欠席させていただきます。 (女(上))

#### 4.1.1 文面の意味構造

(52)は、前件「レディースさんたちが忘年会に出る」が起こるという条件の下では、後件「私たちは欠席する」が起こると言っており、前件が起こって後件が起こらないとしたら、うそになり、偽である。(52)の「pナラq」は、「pバ/ト/タラq」と同じく、「前件真、後件真」の組み合わせの【53】のような場面で発話され、「前件真、後件偽」の組み合わせの【54】のような場面では発話できないわけである。

【53】 レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちは欠席する。

【54】 レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちは欠席しない。

#### 4.1.2 基底の意味構造

(52)の「pナラq」は、「pバ/ト/タラq」と同じ基底の意味構造を持っている。(52)は、「前件偽、後件真」の組み合わせの【55】の場面において、【55'】のように(52)が発話できる場合と【55''】のように(52)が発話できない場合とが想定される。

【55】 レディースさんたちが忘年会に出ないとき、私たちは欠席する。

【55'】 レディースさんたちが忘年会に出ない（後件が起こりうる他の条件がある）  
とき、私たちは欠席する。

【55''】 レディースさんたちが忘年会に出ない（後件が起こりうる他の条件がない）  
とき、私たちは欠席する。

さらに、(52)は、「前件偽、後件偽」の組み合わせの【56】の場面でも発話できるが、前件偽をどう取るかによって、この場面は、【56'】と【56''】という二つの場面として考えることができる。

【56】 レディースさんたちが忘年会に出ないとき、私たちは欠席しない。

【56'】 レディースさんたちが忘年会に出ない（前件を含め、後件が成り立ちうる条件が起こらない）とき、私たちは欠席しない。

【56''】 レディースさんたちが忘年会に出ない（前件という、後件が成り立ちうる唯一の条件が起こらない）とき、私たちは欠席しない。

ところで、「～ナラ」形式には、益岡・田窪(1992)が「ナラには、相手が提供した情報を正しいと仮定して、それから出てくる帰結を述べる用法もある」と指摘しているように、次のような用法がある。この用法は、「～バ」「～ト」「～タラ」形式にはないものである。

(57) A アメリカの大学を卒業しました。

B アメリカの大学を卒業したのなら、英語はべらべらですね。

既に知っている既知の事柄は「～カラ」で結び付くが、(57)の「～ナラ」の前件は未知の事柄  
扱いされているのであり、(57)の状況では「～カラ」は使えない。そして、(57)のような「～  
ナラ」も(52)の「～ナラ」と同じ意味構造を持つ。つまり、(57)の文面では、前件「アメリカ  
の大学を卒業する」が真だという条件の下で、後件「英語がべらべらだ」という推測がで  
きることを言っており、前件が起こって後件が起こらない場面は想定できず、偽になるの  
である。さらに、文に示されていないものの、後件「英語がべらべらだ」が成り立ち得  
る、前件「アメリカの大学を卒業する」以外の条件を想定するかしないかで、「前件偽、後  
件真」の場面において、「pナラq」が発話できたりできなかつたりするわけである。

なお、「～ナラ」には、次のように、「～タラ」と置き換えられる例もあるが、この場合で  
も、その意味構造は(52)の「pナラq」と同じである。

(58) 昼休みに話がまとまり、その夜に実施、の急スピードで、これは札幌の花

見の特徴かもしれない。桜がすぐに散ってしまうし、雨でも降ったなら、

その散り方はもっと早くなる。また今年の五月の連休は三日から四連休で、

休みあけを待っていたなら、時期をのがしてしまう。 (女(下))

以上のことから、「pナラq」は、特殊な用法を持っているものの、その意味構造は、  
典型的な用法のときと同じであることが分かる。

## 4.2 論理構造

### 4.2.1 「(未知)ナラ(未知)」形式

(52)の「 $p$ ナラ $q$ 」が発話されうる場面は、「 $p$ バ/ト/タラ $q$ 」同様、二パターンが考えられる。二パターンのそれぞれの組み合わせに1と0を記したのが、【59】と【60】である。

【59】 レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちは欠席し、カツ  
 $1 \qquad \qquad \qquad 1 \quad \Rightarrow 1$

レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちが欠席しないことはなく、カツ  
 $1 \qquad \qquad \qquad 0 \quad \Rightarrow 0$

レディースさんたちが忘年会に出ない（レディースさんたちの他に、例えば、不仲の職員が出る）トキ、私たちは欠席し、カツ  
 $0 \qquad \qquad \qquad 1 \quad \Rightarrow 1$

レディースさんたちが忘年会に出ない（後件成立のための条件が起こらない）トキ、私たちは欠席しない  
 $0 \qquad \qquad \qquad 0 \quad \Rightarrow 1$

【60】 レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちは欠席し、カツ  
 $1 \qquad \qquad \qquad 1 \quad \Rightarrow 1$

レディースさんたちが忘年会に出るトキ、私たちが欠席しないことはなく、カツ  
 $1 \qquad \qquad \qquad 0 \quad \Rightarrow 0$

レディースさんたちが忘年会に出ない（後件成立のための唯一の条件が起こらない）トキ、私たちが欠席することはなく、カツ  
 $0 \qquad \qquad \qquad 1 \quad \Rightarrow 0$

レディースさんたちが忘年会に出ない（後件成立のための条件が起こらない）トキ、私たちは欠席しない  
 $0 \qquad \qquad \qquad 0 \quad \Rightarrow 1$

(52)の「 $p$ ナラ $q$ 」は、【59】と【60】のどの場面でも発話できる。このうち、【59】は含意「 $p \supset q$ 」の論理構造、【60】は等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造のものであり、(52)の「 $p$ ナラ $q$ 」は二つの論理構造をともに持っているわけである。

### 4.3 「～ナラ」条件表現の解釈

(52)の「 $p$ ナラ $q$ 」は、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造をともに持っているため、状況によって含意とも等値とも解釈できる。ただし、前件と後件を取り巻く一般知識の働きで、含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」のうちのどちらか片方に解釈されやすい可能性はある。例えば、先の(57)B「アメリカの大学を卒業したのなら、英語はぺらぺらですね」は、前件「アメリカの大学を卒業する」が起こらなくても、「アメリカ人の友達と文通をする」とか、「大学は卒業しなくてもアメリカに住んでみる」のような、後件「英語がぺらぺらだ」を成立させ得る他の条件が普通に想定され、含意「 $p \supset q$ 」と解釈されやすい。つまり、周りの常識から、前件「アメリカの大学を卒業する」は後件「英語がぺらぺらだ」の十分条件であって、唯一の条件とは取れにくいのである。一方、

(61) 東京に行くのなら、頼みたいことがある。

は、等値「 $p \equiv q$ 」と解釈される。つまり、(61)では、前件「東京に行く」が後件「(何かを)頼む」の唯一の条件となるわけである。

ところで、草薙(1977, 1983)は、含意、等値以外に、逆含意「 $p \leftarrow q$ 」の論理<sup>9)</sup>を取り上げている。草薙(1977, 1983)によると、例えば、

(62) もしも酸素があるならば、硫黄が燃焼する。

は、 $q$ 「硫黄が燃焼する」が真であれば $p$ 「酸素がある」は必ず真であるが、 $p$ 「酸素がある」が真だとしても $q$ 「硫黄が燃焼する」が必ずしも真だとは限らず、温度が250℃に達しなければ $p$ 「酸素がある」が真でも $q$ 「硫黄が燃焼する」は真にならないとされる。こ

---

<sup>9)</sup> 逆含意「 $p \leftarrow q$ 」は、ボヘンスキー(1970)に倣っている。逆含意「 $p \leftarrow q$ 」については、第二章の2.1.2節を参照すること。

のことについて、草薙(1983;74)は、

(62)は実は逆含意、 $p \leftarrow q$ なのだが、自然言語では、(62)のような文を見た時、他の条件はすべて満たされている、すなわち、温度を250℃以上に上げるというようなことは前提となっていると考えるのが普通で、(62)のような文をその意味で使う。

と述べている<sup>7)</sup>。ところが、1.1.1節でも述べたように、順接仮定条件の前件は、後件を成り立たせるための幾つかの条件のうちの一つにすぎないものであり、(62)で言えば「温度が250℃に達している」のような、前件以外の条件はすべて満たされていると見なされている。(62)の「もしも酸素があるならば、硫黄が燃焼する」は、

- A. 酸素に代わる代用物がある。
- B. 酸素に代わる代用物がない。

の、両方の場面で発話可能であり、これまで述べてきた「 $p$ ナラ $q$ 」と同じく、Aの含意とBの等値の両方の論理構造を持っている。ただし、現実世界の常識から、Aのようなことはなため、(62)は、等値「 $p \equiv q$ 」としか解釈されない。とはいえ、もし、酸素に代わる物質が発見もしくは発明されたとすれば、つまり、現実世界の状況が変われば、(62)は含意と解釈されるのであろう。このように、条件表現の解釈はまさしく語用レベルで行なわれている。さらに、1.3節で述べたように、語用論の範囲を変えて、前件以外の条件がすべて満たされているという前提を特に考えないとすると、草薙(1977, 1983)の逆含意「 $p \leftarrow q$ 」の解釈になる。このように、逆含意は、順接仮定の条件表現の解釈の一つであって、順接仮定条件に内在する論理構造ではない。なお、「 $p$ バ/ト/タラ $q$ 」同様、「 $p$ ナラ $q$ 」も語用論の範囲を変えることで、さまざまな解釈が可能になるが、このような解釈については本節では割愛する(1.3節参照)。

---

<sup>7)</sup> 草薙(1977)にも同じ説明が述べられている。



ところで、「～ナラ」には、

(63) 目覚まし時計が鳴らなかったなら、遅刻していただろう。

のような、いわば反事実的条件文の用法がある。このような用法については、第四章で考察する。

## 5 「～テモ」形式

順接仮定条件を表わす言語形式として「～テモ」が取り扱われることは多くないが、「～テモ」は、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」と関わりを持ち、順接仮定条件に用いられることがある。つまり、「～テモ」は、「テ+モ」に分けることができ、このときの「テ」は「～バ」などの置き換えと考えられるのである。沼田(1986b)は、「～テモ」について、

「も」が「と」「ば」「たら」「なら」をとる仮定条件の形式副詞句をとりたてる場合に、「\*とも」「\*たらも」などできないので、「と」「たら」などが「て」に置きかえられる。

と述べている。また、坂原(1993;200)は、順接仮定の条件表現「～テモ」について、

つまり、「 $p_1$ ならば $q$ 。 $p_2$ ならば $q$ 」のように同一の後件を持つ、二つの条件文が連続するとき、二番目の前件 $p_2$ に「も」を付けようとしても、「\* $p_2$ ならばも $q$ 」などと言えないので、形の上では、譲歩文と同じ「 $p_2$ でも $q$ 」になってしまうのである。

と述べている。以下、「～テモ」形式の考察を行なうことにする。

### 5.1 意味構造

次の例から、「～テモ」の意味構造を、文面の意味構造と基底の意味構造とに分けて考えてみる。

(64) 5番バスに乗っても、市内に出られる。

(65) 急にそんなこと言われても、困る。

(66) 明日雨が降っても、ピクニックに行く。 (草薙(1977))

結論を述べると、「～ても」が発話されうる場面には、四通りのパターンがあると言える。つまり、(64)、(65)、(66)のそれぞれの「～ても」は四つの意味構造を持っているわけである。ただし、逆接仮定条件を成す意味構造を除いて、順接仮定条件としての意味構造は三通りのパターンになる。逆接仮定条件については、第五章で考察を行なう。ところで、順接仮定条件に用いられる「～ても」は、前件と後件の意味内容や「も」の用法に引かれ、一通りか二通りにしか解釈されないことが多く、一つの「～ても」文が三通りすべてに解釈されることはほとんど無い。上に三つの「～ても」の例を挙げたのは、三通りそれぞれに解釈されやすい例から「～ても」の意味構造を一つ一つ説明するためであり、文によって「～ても」の意味構造が異なるということではない。

#### 5.1.1 文面の意味構造

(64)、(65)、(66)の「～ても」は、文面では、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」と同じことを言っている。つまり、前件が起こることを条件にして後件が起こることと、前件が起こって後件が起こらないことはないということが、(64)、(65)、(66)の「～ても」文に示されているのである。

#### 5.1.2 基底の意味構造

順接仮定条件「～ても」が発話されうる場面として考えられる三通りのパターンは、「前件偽、後件真」「前件偽、後件偽」から成る基底の意味構造によるものである。

まず、次の【67】から明らかであるように、「～ても」は、「前件偽、後件真」「前件偽、後件偽」の両方の組み合わせで発話可能である。つまり、(64)は、

【67】 5番バスに乗らない（市内に出られる、5番バス以外のバスに乗る）トキ、市内に出られる。

5番バスに乗らない（市内に出られないバスに乗る）トキ、市内に出られない。

のような場面で発話でき、(65)、(66)も【67】と同じ組み合わせの場面で発話できる、基底の意味構造を持っている。

さらに、【68】から分かるように、「～テモ」は、「前件偽、後件真」のときは偽で、「前件偽、後件偽」のときは真になる、基底の意味構造をも合わせ持っている。つまり、(65)は、

【68】 急にそんなこと言われたい（急でない話、困らない別のことを言われる、または後件成立のための唯一の条件が起こらない）トキ、困る。

急にそんなこと言われたい（急でない話、困らない別のことを言われる、または後件成立のための唯一の条件が起こらない）トキ、困らない。

のうち、「前件偽、後件真」のときは発話できず、「前件偽、後件偽」のときは発話可能である。(64)、(66)の「～テモ」についても同じことが言える。

また、【69】から分かるように、「～テモ」は、「前件偽、後件真」のときは真で、「前件偽、後件偽」のときは偽になる、基底の意味構造をも合わせて持っている。つまり、(66)は、

【69】 明日雨が降らない（後件成立のための、前件以外の条件が起こる。例えば、晴れる、曇るなど）トキ、ピクニックに行く。

明日雨が降らない（後件成立のための、前件以外の条件が起こる。例えば、晴れる、曇るなど）トキ、ピクニックに行かない。

のうち、「前件偽、後件真」のときは発話できるが、「前件偽、後件偽」のときは発話不可能なのである。(64)、(65)の「～テモ」についても同じことが言える。

## 5.2 論理構造

### 5.2.1 「(未知) テモ (未知)」形式

今度は、「～テモ」の三つのパターンのそれぞれの組み合わせに1と0を当ててみる。ただし、それぞれのパターンには、(64)、(65)、(66)の例を使っている。

【70】 5番バスに乗る Toki, 市内に出られ, カツ  

$$1 \quad 1 \quad \Leftrightarrow 1$$

5番バスに乗る Toki, 市内に出られないことはなく, カツ  

$$1 \quad 0 \quad \Leftrightarrow 0$$

5番バスに乗らない (市内に出られる, 5番バス以外のバスに乗る) Toki, 市内に出られ, カツ  

$$0 \quad 1 \quad \Leftrightarrow 1$$

5番バスに乗らない (市内に出られないバスに乗る, または後件成立のための条件が起らない) Toki, 市内に出られない  

$$0 \quad 0 \quad \Leftrightarrow 1$$

【71】 急にそんなこと言われる Toki, 困り, カツ  

$$1 \quad 1 \quad \Leftrightarrow 1$$

急にそんなこと言われる Toki, 困らないことはなく, カツ  

$$1 \quad 0 \quad \Leftrightarrow 0$$

急にそんなこと言われぬ (急でない話, 困らない別のことを言われる, または後件成立のための唯一の条件が起らない) Toki, 困ることはなく, カツ  

$$0 \quad 1 \quad \Leftrightarrow 0$$

急にそんなこと言われぬ (急でない話, 困らない別のことを言われる, または後件成立のための条件が起らない) Toki, 困らない  

$$0 \quad 0 \quad \Leftrightarrow 1$$

【72】 明日雨が降るトキ、ピクニックに行き、カツ  
 $1 \qquad 1 \qquad \Rightarrow 1$

明日雨が降るトキ、ピクニックに行かないことはなく、カツ  
 $1 \qquad 0 \qquad \Rightarrow 0$

明日雨が降らない（後件成立のための、前件以外の条件が起こる。例えば、晴れ  
 $0$   
 る、曇るなど）トキ、ピクニックに行き、カツ  
 $1 \qquad \Rightarrow 1$

明日雨が降らない（後件成立のための、前件以外の条件が起こる。例えば、晴れ  
 $0$   
 る、曇るなど）トキ、ピクニックに行かないことはない  
 $0 \qquad \Rightarrow 0$

このうち、【70】は含意「 $p \supset q$ 」、【71】は等値「 $p \equiv q$ 」で表わされる論理構造のものである。そして、【72】を真理表にまとめると、

(73)

p	q	p テモ q
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	0

のようになる。これらの真理値は、命題論理学でいう後件肯定「 $p \perp q$ 」という論理と同じである。そのため、【72】のパターンは、後件肯定「 $p \perp q$ 」の論理構造を持っていると言えよう。以上のことから、順接仮定条件「 $\sim$ テモ」は、含意「 $p \supset q$ 」、等値「 $p \equiv q$ 」、後件肯定「 $p \perp q$ 」の三つの論理構造を持っていることが分かる。

ところで、「 $\sim$ テモ」が三つの論理構造を持つのは、「 $\sim$ テモ」の「モ」によるものと思われる。沼田(1986b)は、「モ」を、単純他者肯定の「も<sub>1</sub>」、意外の「も<sub>2</sub>」、柔らげの「も<sub>3</sub>」の三つに分けているが、「も<sub>2</sub>」のとき「 $\sim$ テモ」が逆接の意味に取れ、「も<sub>1</sub>」や「も<sub>3</sub>」のときには、逆接の解釈はできないと言っている。そして、以下の(74) b.を「も<sub>1</sub>」、(75) b.を「も<sub>3</sub>」の例として挙げている。

(74) a. 雨が降り出したら、私に知らせて下さい。それと風が強くなったら、その時も私に知らせてください。

b. 雨が降り出したら、私に知らせて下さい。それと風が強くなっても私に知らせてください。

(75) a. こんなところで、彼女に出っくわすと、まずいことになるから…。

b. こんなところで、彼女に出っくわしても私、まずいことになるから…。

つまり、先の、【70】の含意「 $p \supset q$ 」と【72】の後件肯定「 $p \perp q$ 」は、単純他者肯定の「も」に、【71】の等値「 $p \equiv q$ 」は、柔らげの「も」にそれぞれ当たることになる。なぜなら、【70】と【72】の「～ても」の場合は、前件と置き換えられる条件があることをほのめかしているが、【71】の「～ても」に、前件と置き換えられる条件は想定できないからである。

さて、【70】に用いられる単純他者肯定の「も」は、前件に来られる条件同士がお互い対比されていると言える。例えば、前件に来られる条件として  $p$ 、 $r$ 、 $s$  を挙げ、後件を  $q$  とし、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」を「～ナラバ」と総称して呼ぶことにすると、次のような文の並びが考えられる。

(76)  $p$ ならば $q$ 。  $r$ ならば $q$ 。  $s$ ならば $q$ 。

(76')  $p$ ならば $q$ 。  $r$ ても $q$ 。  $s$ ても $q$ 。

(76'')  $p$ ても $r$ ても $s$ ても $q$ 。

(76)のような文の並びにおいて、三つの「～ナラバ」がともに「～ナラバ」のまま言われることはなく、(76')や(76'')のように、「～ナラバ」は「～ても」に変わる。(76)、(76')、(76'')では、同じ後件 $q$ が持てる、 $p$ 、 $r$ 、 $s$ がお互い対比されている。つまり、この場合の $p$ や $r$ や $s$ は、後件 $q$ の成立のための十分条件となるわけである。

一方、【71】に用いられる柔らげの「も」は、前件と対比される条件を特に持たないもの

であり、沼田(1986b)は、

「も」は、一応仮定条件の副詞句をとりたててはいるが、特定の他者を想定したり、文脈の中に見つけ出すことはできない。

と述べている。つまり、【71】の等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造における前件は後件の唯一の条件、すなわち必要条件なのである。

最後に、【72】の後件肯定「 $p \supset q$ 」であるが、(73)の真理表から分かるように、【72】のパターンは、前件がどうであれ、つまり「 $p \vee \sim p$ 」のとき、後件が起こるということを表わしている。“前件が「 $p \vee \sim p$ 」のとき”とは、「 $p$  テモ  $\sim p$  テモ」ということであり、“ $p$  と置き換えられる  $\sim p$  を持つ”とは、【72】の前件  $p$  が後件  $q$  の十分条件だということを意味する。つまり、後件肯定の「 $\sim$  テモ」は単純他者肯定の「も」が付いているわけである。ただし、含意「 $p \supset q$ 」に用いられる「も」と後件肯定「 $p \supset q$ 」に用いられる「も」とは区別すべきである。含意と後件肯定は、両方とも「前件偽、後件真」のとき真になるが、それぞれの  $\sim p$  の中味は異なっている。後件肯定の「 $p$  テモ  $\sim p$  テモ」とは、「どんな場合でも」「すべての場合において」ということを表わしており、 $\sim p$  が「 $p_1, p_2, p_3 \dots$ 」<sup>9)</sup>の形で文に現われる含意の「 $\sim$  テモ」とは異なっている。つまり、後件肯定「 $p \supset q$ 」では、 $p$  テモ  $\sim p$  テモ いつも  $q$  は成り立つことを、含意「 $p \supset q$ 」では、 $p$  テモ  $p_1$  テモ  $p_2$  テモ  $\dots$   $q$  は成り立つことをそれぞれ言っているのである。例えば、 $p$  を「白い」とすると、後件肯定の「 $\sim$  テモ」は「白くても白くなくても（いつも）」を前件で表わしており、含意の「 $\sim$  テモ」は  $\sim p$  を羅列して「白くても黒くても（赤くても青くても…）」を前件で表わしている。そして、実際、「 $p$  テモ  $p$  デナクテモ」といった表現が用いられていると、後件肯定に解釈されやすい。以下、「 $\sim$  テモ」の解釈について触れておきたい。

---

<sup>9)</sup> この「 $p_1, p_2, p_3 \dots$ 」とは、「 $\sim$ バ」「 $\sim$ ト」「 $\sim$ タラ」「 $\sim$ ナラ」の前件  $p$  と置き換えられうる  $\sim p$  の中味を表わしたものである。



### 5.3 「～ても」条件表現の解釈

順接仮定条件「～ても」は、周りの状況や前件と後件の意味内容などにより、三つの論理構造のうちのどれかに解釈されるようになる。

例えば、「酸素があつても、硫黄は燃焼する」という文は、三つの論理構造に支えられているにも関わらず、どうも不自然に感じられる。それは、現実世界で、「酸素がある」は「硫黄は燃焼する」の必要条件であるにも関わらず、「～ても」は、単純他者肯定の「も」、つまり十分条件同士が対比される含意と取れるのが普通だからである。ただし、「～ても」の前件に、特に焦点の置かれる語句が存在するときは、柔らげの「も<sub>3</sub>」に解釈されやすい。例えば、「急にそんなこと言われても、困る」の「急に」や「そんなこと」、「こんなところで、彼女に出っくわしても、まずいことになるから……」の「こんなところ」や「彼女に」には焦点が置かれていると思われるが、これらの「～ても」は、柔らげの「も<sub>3</sub>」、つまり対比される対象が想定されない等値に解釈される。さらに、「も<sub>3</sub>」の後件には、「困る」のような、前件とのつながりを否定的に見る語句が来る。こうなると、前件と後件の関係は、順接条件ながらも逆接条件のような解釈も出てくる。例えば、「急にそんなこと言われても、困る」は、「急にそんなこと言われると、困る」と置き換えられはするが、「急でない状況でそんなことを言われると、困らない。または、そんなことでないことを言われると、困らない。しかし、急にそんなことを言われると、困る」のように、逆接条件とも取れる。沼田(1986b)は、「も<sub>3</sub>」について、「「も」があることで文意が柔らげられる感じがする」といっているが、先の例が等値と解釈されるときは、逆接の意味合いが和らげられているのであろう。前件と後件の関係を和らげるため、極端な場合、「急にそんなこと言われても、……」のように「も<sub>3</sub>」の後件は省略されることもある。次の例を見てみる。

(77) こんな状態で相談を受けても、桑山はこまかな内容は忘れてしまうかもしれない。(女(上))

(78) 夫や子供を話題に出されても、慶子は黙って聞いているしかない。独身でいることをうらやましがられても、いっそう沈黙し、あいまいにほほえむしかない。 (女(下))

(79) しかし、店を教えて、高見ひとりで訪れても、値段は引いてくれないだろう。 (花)

上の(77)、(78)、(79)の「～テモ」は等値に解釈されやすい。それは、(77)では「こんな状態で」に、(78)では「夫や子供を」や「独身でいることを」に、(79)では「高見ひとりで」に焦点が当てられ、それぞれの後件との否定的なつながりが和らげられているように見られるからである。(77)では「こんな状態でなければ(素面であれば)、こまかな内容を忘れない」を、(78)では「夫や子供が話題に出されなければ、独身でいることをうらやましがられなければ(結婚願望のある私にも共有できる話題が出されれば)、黙らない」を、(79)では「高見ひとりで訪れず(常連の私と一緒に行けば)、値段を引いてくれる」という意味合いを和らげていると見られる。さらに、これらの「～テモ」からは、前件と置き換えられる条件は特に想定できない。

さて、先の(66)の「明日雨が降っても、ピクニックに行く」について草薙(1977:104)は、

この文も一見、…含意の否定のように見える。すなわち、

17) 明日雨が降れば、ピクニックに行かないはずだが、行く。

というような意味にとれそうだが、しかし、(66)が表わしているのは、

18) 明日雨が降っても、降らなくても、ピクニックに行く。

であり、前件pのいかんにかかわらず、qが成り立つことを表わしている。したがって、(66)は後件肯定で、 $p \perp q$ と表わす。

と述べ、(66)のような「～テモ」は、17)のような逆接条件は表わせず、18)のような後件肯定

の順接仮定条件を表わすものとしている<sup>9)</sup>。しかし、何を想定して発話されるかによって(66)は17)とも18)とも解釈される表現である。このように、(66)が17)と18)の両方の解釈が可能なのは、「～テモ」が両方の論理構造を持っているからである。17)のような逆接条件については第五章で考察することにし、以下、後件肯定「 $p \supset q$ 」に解釈される実例を見てみる。

(80) 母と綾子の気持は一致している。「お正月ぐらい家事から解放されたい」

別に正月でなくても、一年中、手抜きだらけの家事ではないか、慶子は母をからかってやりたかったが、黙っていた。 (女(上))

(80)では、「正月でない」が $p$ 、「手抜きだらけの家事をする」が $q$ であり、「正月であっても正月でなくとも、手抜きだらけの家事をする」と言っているが、pでも～pでもいつもということは例文中の「一年中」からも分かる。(80)は、「正月であれば、手抜きだらけの家事をする」のような「 $\sim p$ バ [ト・タラ・ナラ]  $q$ 」を想定しながら、 $p$ 「正月でない」を取り立て、「正月でなくても、手抜きだらけの家事をする」と言っているものと見られる。もっとも、(80)は、後件肯定以外に、含意、等値、逆接仮定条件の論理構造を持っているものであり、実際、含意、逆接仮定条件とも解釈できる。ただし、いくつかの論理構造のうちのどれに解釈されるかは、周りの状況による。つまり、これはまさしく語用論の問題である。

ところで、「～テモ」の解釈には、前件と後件になる命題を、話者の意志の要素と見るか非意志の要素と見るか、ということも関わっていると思われる。つまり、「意志テモ非意志」や「非意志テモ意志」は、含意、後件肯定、逆接仮定条件に解釈されやすいが、「非意志テモ非意志」は、等値と解釈されやすい。このことに関しては、今後の課題にしたい。

---

<sup>9)</sup> ただし、坂原(1985)は、18)のような「 $\sim p$ でも $q$ 」を、17)の「 $p$ でも $\sim q$ 」、そして「 $p$ ならば $\sim q$ 」とともに、「 $p$ ならば $q$ 」の否定だとし、特に、「 $p$ でも $\sim q$ 」を譲歩文と呼んでいる。

## 6 二つの条件を持つ条件表現の論理構造

条件表現は、基本的に、条件となる事柄、つまり前件を一個取り上げて後件を引き出し  
ている。ところが、実際には、順接条件か逆接条件か、または仮定条件か確定条件かに関  
係なく、条件となる項目が二つ組み合わせられることがある。小泉(1987;6-7)は、このような  
条件表現を複合論理文と呼び、

- (81) 理由文を含む条件文 「もし p であれば、q であるから、r である」
- (82) 譲歩文を含む条件文 「もし p であれば、q であっても、r である」
- (83) 条件文を含む理由文 「p であるから、q であれば、r である」
- (84) 譲歩文を含む理由文 「p であるから、q であっても、r である」
- (85) 条件文を含む譲歩文 「p であっても、q であれば、r である」
- (86) 理由文を含む譲歩文 「p であっても、q であるから、r である」

のように分けている。これらの分類から分かるように、小泉(1987)は、言語形式別に条件  
表現を分けている。例えば、「～テモ」は、逆接条件以外に順接仮定条件を表わすこともあ  
るが、小泉(1987)は、「～テモ」を譲歩文とのみ見なしている。上の(82)は、

- (82') q であれば、r ではない。しかし、p であれば、q であっても、r である。
- (82'') p であれば、q であっても q でなくても、r である。

の二つの解釈が可能であり、(82')の「～テモ」は逆接仮定条件、(82'')の「～テモ」は順接仮定  
条件なのである。以下、順接仮定条件と組み合わせられている複合文の論理構造を考察する

ことにする。

### 6.1 「pナラバrテモq」「rテモpナラバq」<sup>10)</sup>

「pナラバrテモq」、または「rテモpナラバq」の「～テモ」が後件肯定の順接仮定条件と解釈される場合を見てみる。

(87) 厚手の木綿のスウェット・スーツは、べつに急な坂の昇り降りなどしなく  
ても、真夏の太陽の下では、着ているだけで汗を噴き出させる代物だった  
のである。 (花)

(87)は、単に、「急な坂の昇り降りをしな~~い~~」をp、「汗が噴き出す」をqとする「p  
テモq」と見ることができる。ところが、文全体を考慮すると、(87)に「～ナラバ」表現は  
直接出てこないものの、「厚手の木綿のスウェット・スーツは」は条件節の含みを持って  
おり、(87)は、

(87) 厚手の木綿のスウェット・スーツを着ていれば、急な坂の昇り降りをしな  
くても、汗が噴き出す。<sup>11)</sup>

のような文と見ることができる。「厚手の木綿のスウェット・スーツを着る」をp、「急  
な坂の昇り降りをしな~~い~~」をr、「汗が噴き出す」をqとすると、(87')は「pナラバrテモ  
q」形式であることが分かる。ただし、(87)は、「pナラバq。rナラバq」が「pテモrテ  
モq」の一文になるような含意とは考えられない。(87)の「～テモ」は、「pナラバrテモ～

---

<sup>10)</sup> 以下、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」を総称して、「～ナラバ」と呼ぶことにする。

<sup>11)</sup> (87)をもっと詳しく言うと、「厚手の木綿のスウェット・スーツを着て真夏の太陽の下にいれば、急な坂の昇り降りをしなくても、汗が噴き出す」になる。

「 $r \text{テモ} q$ 」のように取れる後件肯定と解釈される。(87')は、

(88)  $p \supset (r \wedge q)$

のような論理式で表わすことができる。(88)は、(87')が、

【89】 厚手の木綿のスウェット・スーツを着ているとき、急な坂の昇り降りに関係なく、

汗が噴き出し、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ているとき、急な坂の昇り降りに関係なく、

汗が噴き出さないことはなく、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ない（厚手の毛のスウェット・スーツを着る

など）とき、急な坂の昇り降りに関係なく、汗が噴き出し、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ない（薄手の麻の服を着るなど）とき、急な

坂の昇り降りに関係なく、汗が噴き出さない

のような場面で発話されるということを表わすものである。ところで、「 $r \text{テモ} \sim r \text{テモ}$ 」の「急な坂の昇り降りをしてもしなくても」は「何をしてもしなくても」に結び付き、(87)は結局、

(87'') 厚手の木綿のスウェット・スーツを着ていれば、汗が噴き出す。

ということを行っているに過ぎない。(87'')は、含意「 $p \supset q$ 」で表わされるが、「 $p \supset q$ 」と

(88) の「 $p \supset (r \sqcup q)$ 」とは等値<sup>12)</sup>であり、おおまかではあるが、(87')と(87'')が結局は同じように解釈されうるといふことの裏付けになる。つまり、後件肯定「 $\sim$ テモ」の入った「 $p$ ナラバ $r$ テモ $q$ 」形式の(87')は、「 $p$ ナラバ $q$ 」形式の(87'')をベースにしているわけである。ところで、(87'')は、等値「 $p \equiv q$ 」と見ることもできる。この場合、(87')は、

$$(90) \quad p \equiv (r \sqcup q)$$

のように表わされる。(90)からは、次のような場面が想定できる。

【91】 厚手の木綿のスウェット・スーツを着ているとき、急な坂の昇り降りに関係なく、

汗が噴き出し、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ているとき、急な坂の昇り降りに関係なく、

汗が噴き出さないことはなく、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ない（薄手の麻の服を着るなど）とき、急な

坂の昇り降りに関係なく、汗が噴き出すことはなく、カツ

厚手の木綿のスウェット・スーツを着ない（薄手の麻の服を着るなど）とき、急な

坂の昇り降りに関係なく、汗が噴き出さない

なお、小泉(1987)の挙げる(85)のパターンは、(82'')と、二つの条件の順序が変わっただけであり、「 $p \supset q$ 」をベースにしているなど、(82'')と論理構造は変わらない。(87')を(82'')の

<sup>12)</sup> 「 $p \supset q$ 」と「 $p \supset (r \sqcup q)$ 」が等値、つまり同じ真理値であることの証明は、 $r$ が1のときと $r$ が0のときとに分けて、以下に示しておく。

r=1のとき						r=0のとき					
p	q	r	$p \supset q$	$r \sqcup q$	$p \supset (r \sqcup q)$	p	q	r	$p \supset q$	$r \sqcup q$	$p \supset (r \sqcup q)$
1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1
1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
0	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1
0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	1

ように順序を変えると、

(92) 急な坂の昇り降りをしなくても、厚手の木綿のスウェット・スーツを着て  
いれば、汗が噴き出す。

のような「 $r$  テモ  $p$  ナラバ  $q$ 」形式になる。(92)は、

(93)  $r \perp (p \supset q)$

のような論理式で表わせる。(93)は、 $r$ に関係なく「 $p \supset q$ 」さえ真であれば真になる、というものだから、「 $r \perp (p \supset q)$ 」は「 $p \supset q$ 」と等値になる。そこで、(92)も(87")を基にして作られていると言えるのである。ただし、場合によっては、(93)は「 $r \perp (p \equiv q)$ 」のように表わされることもあるが、これは、「 $p \equiv q$ 」をベースにしている複合文である。

なお、「 $\sim$  テモ」が、逆接仮定条件を表わす場合の「 $p$  ナラバ  $r$  テモ  $q$ 」や「 $r$  テモ  $p$  ナラバ  $q$ 」については第五章で詳しく考察する。

## 6.2 「 $r$ カラ $p$ ナラバ $q$ 」と「 $r$ カラ $p$ テモ $q$ 」

「 $r$  カラ  $p$  ナラバ  $q$ 」または「 $p$  ナラバ  $r$  カラ  $q$ 」は、順接仮定条件と順接確定条件が組み合わされているものである。例えば、小泉(1987)は「 $r$  カラ  $p$  ナラバ  $q$ 」と「 $p$  ナラバ  $r$  カラ  $q$ 」の例として、

(94) 今お金があるから、よいものがあれば、買ってもよい。

(95) もし1万円必要であれば、僕が持っているから、貸してあげる。



をそれぞれ挙げている。ただし、(94)や(95)の「 $r$ カラ  $p$ ナラバ $q$ 」や「 $p$ ナラバ  $r$ カラ $q$ 」は順接確定条件「 $\sim$ カラ」の分析と関わっているため、これらの詳しい考察は第四章に譲ることにする。一方、「 $r$ カラ  $p$ テモ $q$ 」または「 $p$ テモ  $r$ カラ $q$ 」は、順接確定条件と順接假定条件の組み合わせとも、順接確定条件と逆接假定条件の組み合わせとも解釈されうるものである。小泉(1987)は、これらの例として、

(96) 急いでいるから、雨が降っても、出発します。

(97) 努力したのに、運が悪かったので、成功しなかった。

をそれぞれ挙げているが、(97)は逆接確定条件と順接確定条件の組み合わせである「 $p$ ノニ  $r$ カラ $q$ 」形式であるため、本節では扱わない。ところで、(96)の「 $\sim$ テモ」は、後件肯定の順接假定条件とも取れば、逆接假定条件とも取れる。つまり、(96)は、「急いでいるから、雨が降っても降らなくても、出発する」とも解釈されれば、「雨が降れば出発しないが、急いでいるから、雨が降っても出発する」とも解釈されるのである。このうち、「 $r$ カラ  $p$ テモ $q$ 」と「 $p$ テモ  $r$ カラ $q$ 」の論理構造については第五章で、そして「 $p$ ノニ  $r$ カラ $q$ 」と「 $r$ カラ  $p$ ノニ $q$ 」については第六章で考察することにする。

## 7 本章のまとめ

本章では、順接仮定条件の言語形式として、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」「～テモ」を取り上げ、それぞれの言語形式がどのような場面で発話されるのかを分析した。想定する場面としては、「前件真、後件真」「前件真、後件偽」「前件偽、後件真」「前件偽、後件偽」の四通りの組み合わせをワンセットとし、順接仮定条件が発話可能な組み合わせと発話不可能な組み合わせとをまとめた。分析の結果、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」は、次のような二パターンにまとめることができる。ただし、未知の前件を  $p$ 、未知の後件を  $q$  とし、1は真、0は偽を表わす。

$p$	$q$	$p$ ナラバ $q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

$p$	$q$	$p$ ナラバ $q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	1

ところで、これらはそれぞれ命題論理学における含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の真理値と一致するため、本研究では、これらの呼び方と論理式をそのまま用いて、「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」は含意「 $p \supset q$ 」と等値「 $p \equiv q$ 」の論理構造を持つとする。さらに、順接仮定条件に用いられる「～テモ」は、

$p$	$q$	$p$ テモ $q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

$p$	$q$	$p$ テモ $q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	1

$p$	$q$	$p$ テモ $q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	0

のような三パターンにまとめられるが、これらはそれぞれ含意「 $p \supset q$ 」、等値「 $p \equiv q$ 」、後件肯定「 $p \perp q$ 」の真理値と一致するため、「 $\sim$ テモ」は、含意「 $p \supset q$ 」、等値「 $p \equiv q$ 」、後件肯定「 $p \perp q$ 」の論理構造を持つとする。

このような結果から、例えば、「 $\sim$ バ」という同形の言語形式に含意と等値という異なる論理構造が内在したり（このことは「 $\sim$ ト」「 $\sim$ タラ」「 $\sim$ ナラ」「 $\sim$ テモ」のそれぞれにおいても同様のことが言える）、さらに、「 $\sim$ バ」「 $\sim$ ト」「 $\sim$ タラ」「 $\sim$ ナラ」「 $\sim$ テモ」という異なる言語形式に含意（または等値）という同じ論理構造が内在したりして、言語形式と論理構造は必ずしも一対一対応をすることは限らないということが分かる。特に、同形の言語形式に異なる論理構造が内在することから、解釈の際、曖昧さが生じてくることもある。例えば、

(98) 筆記試験にパスすれば、A大学に入学できる。

は、A大学の入試には筆記試験と実技試験があってそのどちらか一つに受ければ入学できるとすると含意「 $p \supset q$ 」の解釈であるが、両方の試験に受かることが入学の条件だとすると等値「 $p \equiv q$ 」の解釈になる。つまり、含意の論理構造の前件は十分条件であり、等値の前件は必要条件なのである。さらに、

(99) 太郎といても、楽しくない。

は、「太郎といても次郎といても、楽しくない」（含意）のか、「太郎といると、楽しくない」の太郎に焦点を当てて否定的なつながりを和らげている（等値）のか、「太郎といても太郎といなくても、楽しくない」（後件肯定）のか、それとも、「太郎といると楽しいはずだが、太郎といても、楽しくない」（逆接仮定条件）のか、(99)の文だけでは分かりにくく、周りの状況を見て解釈せざるをえない。ただし、前件と後件の意味内容によっ

ては、特定の論理構造に解釈されやすいこともある。例えば、

(100) 彼が当たりくじをひけば、俺にはチャンスがない。

A. 三人がくじをひくが、当たりくじは一枚しかない。

B. 二人がくじをひくが、当たりくじは一枚しかない。

において、(100)は、AとBの両方の場面で発話可能である。Aは含意の論理構造、Bは等値の論理構造の場面であるが、(100)の文は、Bの等値に解釈されやすい。それは、(100)の文からは二者択一を頭に浮かべやすいからである。しかし、だからといって、(100)が等値の論理構造しか持たないわけではないのである。

以上のように、順接仮定条件の前件と後件の間には幾つかの論理関係が内在しているため、解釈の際はどの論理構造を持つ発話なのか混乱が起こりうる。しかし、論理構造をメタ言語としての論理式で記述することにより、言葉による説明で起こりうる、幾つかの論理構造が混ざって解釈されるおそれがなくなり、それぞれの細かい論理構造が一目で分かるようになったと思われる。さらに、順接仮定条件の解釈に曖昧さが起こるメカニズムが解明できたと思われる。なお、本章における、含意や等値、後件肯定の論理構造は、順接確定条件や逆接条件の前提になるなど、もっとも基本的な論理構造のものである。